

授業方法について独自に工夫していること 【人文社会学系】

アクティブラーニングを意識して、学習者主体の授業を行っている。
発表形式をとっているため、学生たちの発表の前には、授業時間以外に個人的に指導・助言をしている。
学習者自身が満足でき納得がいく発表をすることができるように、授業時間外の時間で発表練習の工夫、および、発表の仕上げを行っているので、その指導をしている。
学生たちが授業内容を深めあえるために、発表内容を毎時間書かせ、グループでの合評会も行っている。

・学生さんたちが普段触れにくい情報に触れたり、多様な進路を見据えられるよう、多様な働き方をしている大人と関わることを通じて、児童・生徒たちの進路指導・キャリア教育・職業指導をより具体的に考えられるようにした。
・グループでのディスカッションを多く取り入れることで、自分たち自身で進路指導・キャリア教育の課題に気づき、考えを深められることを目指した。

・前半では講義形式でキャリアの理論について学習し、中盤ではそれを生かして自己の問題を考えるワークを実施することで、理論を踏まえた支援の方法について、より具体的に理解できるようにした。
・ゲスト講師をお招きすることで、社会に出た時を具体的にイメージできる機会を創るとともに、具体的にどのような行動を起こしたらよいか考えるきっかけになるような講義を行うようにした。
・グループワークを通じて、学生同士のコミュニケーションを図るとともに、身近な地域課題について、具体的にプランを練ってもらうことで、社会に出た時に講義での学びをどのように生かせるのか考える場を設けた。

出席状況とレポートのできばえ。

テキストの丁寧な読解と解説。
配布プリント等、補助教材の作成。
新聞記事、雑誌記事等を活用した、現在の教育との関連づけ。
ディスカッションによる、双方向的な授業の工夫。

一番目は卒論用ゼミだが、報告を受けて対話するのを基本とし、ともに問題点や解決策をさぐっている。
二・四番目は、研究室ウェブサイトからリンクしてある動画講義(ユーチューブ)を活用。
三番目は、リポトリから論文をダウンロードさせて読ませている。
五番目は、第一班の事前指導を入念に行ない、第二班以降に対しては授業時に適宜留意点を告げている。

データ(図表)を多用して、学生が理解しやすいように工夫した。毎回、コメントシートで質問や意見を提出させ、そこに書かれた質問には次の授業で再度説明した。

国文学講義AI→90名近くの学生に対する授業であったため、意見文などを書いてもらった際には、一方的にならぬよう双方向で意見を紹介できるように心がけた。あるときはプリントで配布し、あるときはPowerPointで取り上げて紹介するなど。
国文学演習AⅡ→演習授業のため、できるだけ他大学や市立図書館等に足を運び、自ら調べなければならぬような課題を提示するようにした。

毎回、史料プリントを3枚ほど用意し、できるだけ丁寧に説明するように心がけている。また、プロジェクターを使用し視覚的にも理解度を深める授業をした。

音声学・音韻論では、実際に音を聞き分けたり、発音し分けたりという実践的なことも必要となるので、音声を聞くテストは必要である(発音させるテストまでは、実施できなかった)。資料を配付することで理解を深めるようにもしている。
日本語史を教えるのは初めてでもあり、まだ手探りであった。

この授業の形式は、具体的な事例をVTRで示しながら講義を進めるというものである。毎回、授業の始めに、その回の内容やVTRの見所など、授業の目標を明確に提示する。また、授業の受け方、ノートを取り方、授業と試験の関係など、第1回目の授業をオリエンテーションとして丁寧に説明する。ただVTRを見せるのではなく、いかにノートに内容を定着化させるか、そして、いかに内容を具体的に理解させるかというところにもっとも力点を置いている。

日本民俗学の手法による地方史研究の実践という観点から、現地調査を行うための事前調査の方法や技能を身につけることに力点を置いた。授業中に学生が発言する場面を多くするように心がけた。実際に現地の図書館や博物館などに出向き、実物資料にふれることによって資料を収集するように工夫した。授業中の発言・討論への参加度(積極性と内容)や、課題(たとえば、先行研究の文献資料の中から関心を見出し、さらに情報収集を広げる)への取り組みを重視した。

講義形式の授業では、①各トピックスごと受講者各自に問いを自覚的に持たせること、②説明を自身の有する言語辞書と照らして自分のことばで理解し直させることの2点を心掛けている。
演習形式の授業では、事前に発表担当者と①取り上げるべき問題点、②考察に導くための方法論、③他の受講者を巻き込んで検討させるための問いの準備などに関して1.5H程度の打ち合わせを行っている。演習時にもリアクションペーパーに毎時間、各受講者の疑問点を記させ、発表担当者のみならず、教員も回答を返す形式をとっている。

学生同士の質疑応答がなされることが望ましいと考えているため、学生からの質問が出るまで待つように努めた。

講義の授業では冒頭に、その回のテーマに関心を持たせる発問をし、なぜそのような現象が起こったのかを考えさせる。

日本史探求の基礎となる、史料読解のための和製漢文の読み方を少しでも身に付けてもらうための授業であるが、ただ理屈だけでは「素人」の学生にとって苦痛となってしまうかねない。そのため、なるべく学生が興味関心を持つような人物や出来事についての具体的な史料(ただし、和製漢文の特徴的な要素が多く入っているもの)をセレクトし、時代背景なども絡めて、その中でできるだけ自然に和製漢文に親しめるように考えた。

・歴史学の特質や留意点をなるべく明確に見てとることができるような研究史上のテーマを選び出す。
・どのような根拠や論理によってある学説がつくられ、どのような理由でそれが批判されたのか、を学生にも理解できるように明確かつ平明に整理し、説明する⇒「絶対の真理」は無いのであり、どのような学説も相対化できることを認識しやすいように講義を進める。

書道演習Ⅱ・Ⅳは、書写に関する理論のほか、実技指導を行う。実技指導では、個別に、学生の実技能力に応じ、課題の克服に向けて指導している。また、ペアやグループで学習内容について話し合いを行ったり、相互批評も取り入れて、指導する際の見方も養うようにしている。

毎回グループ発表を行い、必要に応じてそのための事前指導を個別に行っている。また、発表および教員からのコメントはすべて英語で行うことで、英語によるコミュニケーション能力の向上を図っている。

講義の授業であるが、毎回グループ発表を行い、必要に応じてそのための事前指導を個別に行っている。また、発表および教員からのコメントはすべて英語で行うことで、英語によるコミュニケーション能力の向上を図っている。

・外国史概説Ⅰの授業では、きわめて限定された時間枠(7回)の中で、免許科目として外国史東洋史分野に関する基礎的な知識(中国を中心とする東アジアの古代から近代史)を習得させる必要があるため、内容を精選し、配付資料を極限まで整理した形で作成している。また、少しでも学習内容を定着させるため、できるだけ板書を中心とした授業の展開を心がけている。これは聴覚障害者の受講生に対する配慮でもある。

・東洋史特論Ⅰの授業では、中国古代史の最新の研究成果を中心として、歴史学の方法論を学んでもらっているが、専門外の受講生も多いことから、配付資料を丁寧に作成し、原典史料に書き下し・現代語訳を付すなどしている。

・演習・講読の授業では、学生が課題に対する調査・読解・解釈・報告を行い、また細かくレポートを課すことで、能動的な学びを实践できるよう工夫している。学習効果はきわめて高い。

授業内容の性質から、受講生には授業外での課題をできる限り課し、併せて、教員からは、個々人の内容に対応したフィードバックをするようにしています。

・授業にディベートを採り入れ、学生自身による問題発見、課題設定、事前検討、報告、報告後のふり返しを行わせ、課題に対する理解がより深まるような工夫をした。

・ネット上に授業専用のプラットフォームを設け、レジュメやコメントなど情報共有、意見交換のために活用した。

学生がリアクションペーパーに書いた内容に、次回の授業で応答するなどして、双方向的な授業になるよう工夫している。

3503111 S 国文学講義BⅠにおいては配布資料を工夫し、復習に必要な情報量の提供を意識している。
4503204 S 国文学演習EⅡ・2501061 S 国文学演習AⅡについては、事前・個別の指導に留意している。

いずれも社会科・地理学の専門にかかわる難易度の高い内容や理論・方法論を中心とした授業であるが、地理学初学者にも理解可能なように、豊富な資料、具体的な事例、わかりやすい説明を心掛けた結果、多くの項目で専攻科目の平均値をはるかに超える高い評価を得た。

学生が主体的に参加できるように工夫している。教師がトップダウンで知識を提供するのではなく、学生に問題点を探させ、それを考え、解決するような方向で授業を構成している。活動の結果を内省、省察する時間を設けている。内省、省察は、レポート、調査(設問に回答する形式)で、行い、これを集計して教師が授業の教育的効果を考察する資料をしている。レポートは、データとして保存分析、設問は統計分析している。結果は、実践報告としてまとめ、キャリアセンターをはじめとする本学の紀要等で公開している。

2413631心理アセスメント講義:学生に自主的に調べ学習させて発表させた。
2413681心理教育統計学実習:SPSSのソフトの使い方と結果の記述について説明した。

漢文は、日本語訳を読んでもピンとこなかったり、深く理解することができなかつたりすることが多い。そのため、受講者みずから調べて発表を担当し、担当以外の学生も主体的に発表を聞いて異見を言うことができるよう、今回の授業を組み立てた。

講義の科目であるが、主体的な学びを行うため、各回の講義は学生による発表形式にしており、質疑についても発表者が回答する形式にしている。

演習発表をするにあたって、事前の打合せを行っている。

独自だと言えるような工夫は特にない。
一方的な講義はよろしくないという風潮なので、講義であっても学生同士で考えたことを話し合わせるとか、想定している授業内容を薄めてでも学生の理解度を確認しながらペースを落とすといったことはしているが、どなたでもなさっていることと思う。

演習形式の授業のため、学生の発言を促すための環境作り。具体的には学生の質問・コメントの後に、教員側から補足やフォローをすることにより、学生の発言を孤立化させず、発言しやすくなる環境作りに留意している。

学生自身が、知識を享受する部分と、前で話す部分、自ら作業する部分の3部で展開するように意識している。
また、ipadを利用し、実際の筆の動きなど、細部の見せ方・提示の仕方も併せて体験させるようにしている。

①②共にパワーポイントに頼ると受け身になりがちとの考えから、しっかり手を動かしてもらうために板書を基準にして授業を組み立てている。
①については、内容の説明→プリントを配布しての練習問題→問題の解説、を1サイクルとして理解した実感を持ってもらうようにした。

- ・学生が図書館での調査を円滑に進められるよう、授業内で図書館ツアーを行い、辞書類や専門書の位置などを確認した。
- ・学生にワークシートやグループ作業を課す場合には机間巡視を積極的に行い、課題の進行度・理解度を把握するよう努めた。
- ・グループで行う演習発表に際しては、コメントシートに発表についての感想・意見を書いてもらい、個人が特定できないように若干の操作を施したうえで次の授業の冒頭で受講生全員に共有した。またそれを受けた、発表グループによる補足説明の時間を設けた。
- ・学術的なレポートの書き方について再確認するためのプリント、ワークシートを作成した。

概説では毎時間プリントを配布し丁寧な解説を心掛けている。全体で20枚程度になり、テストも教科書だけではなくプリントからも出題している。
演習では教育実習の予行演習を兼ねて、板書を義務付けている。

主に1年生に向けて、日本文学の近現代の作品を紹介しながら、表現活動と当時の社会背景などとの関係性を学ばせ、自ら考えさせる授業を行っている。
学生たちは高校時代、文学史を「暗記科目」として捉えていただろうが、本授業では単に事項の暗記ではなく、どういう時代の流れの中で表現や思想が生まれたのかということを改めて学ばせることで、時代を超えて表現・思想を考える応用力を身に付けさせ、現代を生きる教員としての教養を習得させようと試みている。
また、単に教員の話聞いて終わりにしないようにするため、その日の授業内容に関する課題を出し、授業の後半に学生にコメントを書かせるようにし、翌週の授業でそのコメントに言及する、ということを行っている。

講義形式の授業の場合は、できるだけコミュニケーションペーパーを利用して、毎回の授業に前回のフィードバックを行うようにしている。原書講読に準じる授業の場合は、配布するテキストを自分で作成し、学生のレベルに合わせて適宜注釈や補記をするなどして難易度を調整するようにしている。

授業の5コマに関しては、福祉現場の最前線で働くエキスパートを生きた教材として授業に招き、実践と理論の融合を図り、学習を深めた。

15回の講義では毎回、コメントシートにより学生の感想・疑問点のほか、授業評価と学生の授業取り組み評価を5段階で行わせて提出させている。次時の初めに疑問点を解説し、評価の高い感想を示しながら復習を行いながら前時との関連を示して導入の時間を設けている。また、それらの取り上げる疑問点と感想のほか、授業評価と学生の授業取り組み評価の平均値を資料に明記して配付している。

どのような基準で学業成績の結果を出したか。 【人文社会学系】

1) 学習者の発表、および、発表に至るプロセスを踏まえて評価した。
2) 本授業、および、これまで受けてきた英語教育において得た知識・技能を、どのように本授業で活かしたか？について、学習者の発表とそれを参観していることを、「授業の感想」としてレポートを毎時間提出してもらい、それを授業への参加度と合わせて評価した。
3) 最終レポートとして、本授業で学んだことを、今後の学校現場でどのように活かしていくか？についての評価を行った。

・小レポートの提出や、議論への参加度、最終試験の結果を総合して評価を行った。

・小レポートの提出と、グループ課題への貢献度、最終発表(プレゼン)の相互評価を総合して評価を行った。

出席状況とレポートのできばえ。

シラバスに記載の通り、出席状況とレポートによって、総合的に評価した。
Se教育哲学演習については、例年に比べて受講者の欠席が多く、そのため低い評価が目立った。

一番目は、各回の個人レポートの発表を見て評価(ゼミなので欠席は基本的にあり得ない)。
二～四番目は、レポート審査(五回欠席でD)。
五番目は、グループ別レポート発表と変体仮名解読テストを50:50として判断する(五回欠席でD)。

筆記テストが基準である。テスト内容は授業で述べたことが中心のうえ、教科書・ノート・プリントの持ち込みは許可にしたので、ほとんどの学生はなんなく合格している。毎回提出のコメントシートの提出で加点している。

国文学講義AI→レポートの内容と毎回の授業で課した意見文の内容を総合して評価した。

国文学演習AⅡ→演習発表の態度とレポートの内容を総合して評価した。

記述式の回答で、16回講義の2回分の内容をまとめるテストをし、その記述内容から授業を聞いていたのか、内容を把握していたのか、判断し採点した。

どの授業でも、第一回目に紙のシラバスを配付している。そこに成績評価方法を記している。
「音声学・音韻論」では、出席(30%)と小テストなどのパフォーマンス(70%)で評価する。
「日本語史」では、
授業参加・議論への積極的な参加 20%
プレゼンテーション 30%
文法化に関するレポート 25%
まとめの試験 25% とした。

授業期間中に授業の内容を問う中間筆記試験をおこない、学期末に授業の内容を問う期末筆記試験をおこなう。中間試験の結果35%、期末試験の結果65%の合計で成績を出している。

発表の内容(35%)、授業中のコメント力(45%)、調査報告書(レポート)(20%)の審査から総合的に評価した。

通常の授業時の作業への取り組み状況や受講姿勢に、自ら積極的に学ぶ様子が見えるかどうかを見た。さらに、定期試験においては、授業で目標とした範囲の基礎的な知識が理解できているか、単なる暗記に止まらず、自身の言語活動のありようとして自らのことばで説明できているかを基準として成績評価を行った。

①演習発表(2回)の出来、②最終レポートの出来、③授業時の質問の回数や質、を総合的に踏まえて成績をつけた。

期末試験形式であったので、設問ごとに採点基準を設定して採点に臨んだ。採点基準の設定方法は、授業で扱ったテーマのうち、欠かせない情報であるか、書くのが望ましい情報か否かで、配点に差を設けた。

試験で和製漢文の史料をどれだけ読めるか、またそこから時代背景について言及できるか(そのためには、普段から自分で参考になるような文献を捜し、読んで、知見を深めておく必要がある。それはあらかじめ告知してある)を採点した。

講義で強調した論理的・批判的視点で文献を読み、その成果や問題点を自分の頭で考える(ような姿勢を見せる)ことができているかどうかを重視してレポートを採点した。

毎回の授業における学習活動(課題への取り組み方)や学習目標の達成度への評価を中心に行っている。書論講読においては、これら以外に、確認テストと、発表への取り組み方(発表資料作成への取り組み方も含む)も加味して総合的に評価した。

グループ発表が20%、二回のクイズが40%、ファイナルレポートが40%であるが、授業への積極的な参加(発言等)に10%加味している。

グループ発表が20%、二回のクイズが60%、ファイナルレポートが20%であるが、オプションとして他グループの発表に関するレポート10%を加味する。

・外国史概説 I は、授業で取り上げた内容を論述形式で説明させる試験を実施した。基礎的な項目の理解度に加え、学習した内容をきちんと表現できているかを判定している。これに平常点(受講姿勢)を加味して成績評価を出している。平均点は75点前後であり、免許科目として適当であると考えた。
・東洋史特論はレポートの提出を課した。採点項目は(1)日本語の文章表現、(2)内容の理解度、(3)調査・参照した範囲、(4)独自の考察、の4点であり(90%)、これに受講姿勢を10%加味して評価を出した。成績はSからCまで分かれた。
・演習・講読では、授業での課題の報告内容、他の報告への質問や討論への参加、最終課題の提出、の3つから採点を行った。受講生はおおむね積極的に学習に取り組んでおり、成績評価は比較的高い結果となった。

日々の課題、小テスト、最終レポート等を総合して結果を出しました。

・普段の授業へのとりくみ(出席を含む)
・グループ報告(ディベート)においてどこまで課題について調査し、考察しているか。
・期末レポートでは、授業の基本テーマである「法の支配・法治主義」について、ディベートの課題としてとりあげた問題に引き付けて、具体的、客観的、かつ、法的に考察されているかを評価した。

ふだんの授業態度等についての平常点と、期末のレポートの評価によって、成績を出した。

3503111 S 国文学講義B I においては、基礎的な知識と論述の力の育成を目指したので、半期の間に三回の試験(論述)を設定し、出題内容を事前に提示して準備の時間を与えたり、書き方についての基本が身に付くように論述のルールを提示しておいた。したがって、事前に公開した評価基準に基づいて、答案を評価した。4503204 S 国文学演習E II・2501061 S 国文学演習A IIについては、発表の出来と授業参加度(意見・質問の回数、出欠席)の合算によって評価することを最初に示した。発表については四項目の評価の観点をあらかじめ示し、それに基づいて点数化した。

授業で話した内容の理解度と、授業外での努力や授業における表現力をもとに成績を算出した。

授業での活動への取り組み、発表、レポート、授業態度、出欠等を総合的に評価している。

2413631心理アセスメント講義:毎回のレポート発表
2413681心理教育統計学実習:最終レポート課題

出席と授業参加度30%、中間テスト20%、発表担当20%、質疑応答参加10%、レポート20%の配分で評価した。

発表について(23%)、試験(77%)で評価をした。学生の多くはS、A評価であったが、一部B、C評価がみられた。

打合せの状況、発表内容、授業における積極性、レポート内容などを踏まえて、成績評価を行っている。

演習では期末の筆記試験(60%)、授業への参加姿勢(10%)、発表内容(30%)で評価。
講義では期末の筆記試験(80%)のほか、毎回の授業参加における積極性(20%)を加えて評価。
いずれもシラバスで明示したとおり。

各自の発表内容と、発表を経ての最終レポートが成績評価の大きな部分となり、他の発表者に対する発言なども加味して成績を決めた。

知識の定着の度合いと、発表への意欲や実際に出されたプリントの出来を加味している。
高校書道の免許に関わる科目である以上、高校書道 I の基礎レベル程度には知識量が必須である。
また、書道 I で出てくる書家についての知識も必須であると考えている。

①②ともに試験を実施し、これらの絶対評価で結果を出した。

成績評価の基準の内訳は、出席・授業態度15%、発表30%、期末レポート55%とした。
出席・授業態度については、出席回数と授業中の発言回数、ワークシートやグループ作業に取り組む姿勢を総合的に判断して点数をつけた。発表については、声の大きさ、速度、目線、発表内容、補足説明の有無やその内容を総合的に判断した。期末レポートについては、先行研究5つをふまえたうえで、具体的な用例にも目配りをしながら論理的に自分の意見を示せているかどうかに着目して評価を行った。先行研究の引用方法に問題がある者(出典を明確にしていない、先行研究と自分の見解の線引きがあいまいである)については、低い評価とした。

概説はテストと出席、演習はテストと出席に加えレポートも課し、それらを総合して成績を出した。テストだけで評価を行わなかった。

学期末にレポートを提出させた。

単に授業で教えたことを理解しているかどうかを確認するだけでなく、授業で得た知識を前提に、自ら問題設定を行い、現代の問題を考えようとしているか、を基準に評価を行った。

また、論理的な文章を構成できているかどうか(論拠が示されているかどうか、一貫性があるか、問題提起に対しそれに応じた回答が示せているかどうか、等)を基準に評価を行った。

そして、各回の授業で書かせたコメントの内容も、評価対象に加えた。

原書講読を中心とする少人数の演習科目については、授業までの準備と授業中の積極性を評価している。レジュメ作成を義務づける場合は、担当時に無断で欠席した場合は単位認定をしない、など事前に責任感をもって取り組むように強調して伝えている。人数の多い授業の場合は、公平性が担保できるように留意しつつ、複数回のテストを実施して、成績評価をするようにしている。

毎回授業終了後のレポート(5点満点×15回=75点満点)と定期テスト(25点満点)で評価した。

本講義の評価は、最終レポート(90%)と小レポート(5%)、小テスト(5%)の結果によって評価した。その際、評価は講義内容の水準に達しているものをBとし、その水準に達していないものの、地誌の理解及び地誌レポートとして最低限の水準を満たしているものをCとした。Aは講義内容の水準を十分に達し、その水準を超えようとしているもの、Sは講義内容を超えているものとした。

アンケート結果を受けて改善したいところ 【人文社会学系】

授業の難易度が「難しい」と回答した学生が41.9%、「ちょうどいい」が58.1%、一回当たりで扱われる授業内容の量が「ちょうどいい」45.2%、「多い」が48.4%、「多すぎる」3.2%であった。学生が主体的に取り組める授業を心がけていることが、約半分の学生にとって負担となっていることが分かった。

今後は、少し、量を減らして、また、難易度も低くして授業をすることを心がけたいと思った。

- ・少数ではあるが、内容が難しいと回答している学生さんや、授業内容の量が多いと回答している学生さんもいたことから、1時間で取り扱う内容については、引き続き吟味し、精選していきたい。
- ・一方で、この授業のための週当たりの学習時間が1時間未満、なし合わせて70%だったことを踏まえ、次年度以降は家庭での学習課題を提示するなど、授業外でもさらに発展的学習が進められるよう工夫していきたい。

- ・資料や教材の提示の仕方がよくなかったという回答が1名ではあるがいたため、次回からはわかりやすい資料になるよう工夫するとともに、内容についてももう少しコミュニケーションをとれる方法を模索していきたい。
- ・授業で取り扱う内容については多すぎるという回答が目立ったため、今後はもう少し吟味して内容を削減していきたい。

特になし。

アンケートの結果からみて、授業の目標はある程度達成されたと思う。授業の性格上、抽象的な議論になりやすいので、現実の教育問題との関連を意識した授業内容にしていきたい。

このままでいいと思っている。

授業の内容に関わる問8・9・10・11で3分の2以上の肯定的な評価を得ているので、基本的に現行の授業のやり方で良いと判断している。

国文学演習AⅡでは、難しいという評価が多かったため、指導の仕方や課題について再考し、今後に生かしていきたい。

全く基礎知識がないことを教えるため、講義形式とした。おおむね授業をよく聞いてくれたが、なかにはまったく関心を示さず中には注意しても内職をしている学生が数人いた。記名式ではないので確証はないが、アンケートに否定的な学生はそのような学生だと考えるが、どのように接したらよいか、対応策を検討中である。

①～②のプラス回答が、問1では全体の96.3%、問5では70.0%、問6では73.3%、問7では66.7%、問12では76.7%を占めたことから、日本の民俗文化理解という所期の目標はほぼ達せられたととらえている。しかし、問2・問11において、③～⑤のマイナス回答が、問2では53.4%、問11では62.76%を占めた。また、問9の説明のわかりやすさを問うプラス回答は80%であったが、問13では、53.4%が難しい、難しすぎると回答した。問2、問11、問13には特に改善点があると受け止めた。授業の双方向性を強化して、コミュニケーションをとおしてわからない点を明確にあぶり出すようにし、課題に対して自らが問題点を見出し、アプローチし、発言する・行動するということが達成できるように、今後、さらに留意して授業を構築したい。

ほぼ全体的に①～②のプラス回答が、80%を超えたことから、日本民俗学の手法により地方史研究を試みるという所期の目標はほぼ達せられたととらえている。しかし、問8(教員の話し方は聞き取りやすいか)において、③～⑤のマイナス回答が、50.0%を占めたことに、改善点があると受け止めた。話し方に留意して授業を進めるようにする。

授業によっては、授業外の学習時間が短いものがあった。もう少し、授業での学習活動で得た認識や知識を定着させたり、深めたりする動機づけを工夫したい。

演習の授業で、授業難易度に「難しい」と答える学生が4割ほどいたため、もう少し難易度を落とした授業にすべきかもしれない。

授業の難易度に「難しい」と答える学生が4割ほどいたため、もう少し難易度を落とした授業にすべきかもしれない。

教員側はできるだけ学生と遣り取りしながら技術を伝えているつもりであるが、学生の中にはその中に入っていけないと感じている者もいたようである。その点には、さらに目配りするようにしていきたい。

学生同士で学び合う形は理想であるし、そうした側面を強めるようにもしたいが、学生にとって殆ど未知のテーマについて学んでもらうためには、まず講義を聞いてもらうことが大前提になることも事実である。教員の講義が中心になる形は維持しつつ、どのように学生の主体性や協同性を深め(得)めるのか、常に模索しつづけている。

書論購読では、授業内容の難易度や、授業内容の量、進度などに検討課題が見られるため、それらについては、来年度に向けて見直していきたい。

問11の教員とのコミュニケーションに関して、うまく取れていないと考える学生が半数以上いるので、授業中に質問時間を多くしたり、オフィスアワーの活用を考えたい。

問1から問8までは、「強くそう思う」と「ややそう思う」を合わせて8割を占めているが、問7については6割強となっているので、授業目標がより意識されるような方向で改善したい。また、授業が「難しい」と「難しすぎる」6割を超え、授業内容の量も「多い」と「多すぎる」を合わせて3割を超えているが、学習時間3時間以上18%、2～3時間が14%と少ないことを考えると、内容の難しさおよび多さに見合っただけの学習を行っていないことが懸念される。まずはオフィスアワーの活用をさらに促したい。

・外国史概説Ⅰの授業では、全体の流れが分かりにくいという声があり、また学生とのコミュニケーションに低い結果が出ている。多人数の授業であり、しかも時間的な限定がきわめて厳しい授業であるため、改善は困難であるが、授業で取り上げる内容をもう少し減らし、問いかけや考察を入れる余地がないかどうか考えたい。

・東洋史特論Ⅰの授業では、専門性が高かったためか、やや理解度に難がみられた。ミニ・レポートや討論の機会を設けることができれば実施してみたい。

授業の難易度や授業内容の量が「ちょうどいい」という意見が多かったが、力をつけるという意味では、物足りないのではないかと思います。そのため、もう少し難易度を上げ量を増やすことが必要と思いますが、その分、こちらの添削にさらに時間がかかるのが悩ましいところです。

15回の授業を通して、学生は意欲的にディベートなどの課題に取り組み、それぞれに日本の公法分野が抱える課題を発見した様子だった。ただし、この授業に割り当てられた学習時間(問15)に関するアンケート結果の最大多数は、「1時間未満」と思いのほか少なかったのは、授業担当者が意図したところとは異なっていた。これには、近年のネット環境の利便性の向上も影響していると考えられるが、もう少し図書などでじっくり問題に向き合うような学習スタイルが身に付くよう授業を工夫する余地があると感じた。

話し方について厳しい意見があったので、今後気をつけたい。

授業目標と評価観点のさらなる明確化によって、学生がもっと意欲的に取組めるようにしたい。

(2)で書いた通り、特にない。引き続き、今のレベルを維持していきたい。ただ、理解度の低い学生もいるため、そのケアには常に注目していきたい。

学生個人や集団がどのような知識や経験等をもっているかをしっかり把握すると、より学生のニーズにあった授業が構成できると思う。そのため、学生との交流の機会を増やす努力をしている。授業期間中は、授業に関するメールのやりとりも、学生との信頼関係を構築できるように努め、随時、授業改善に努めているが、これをさらに充実したい。

2413631心理アセスメント講義:ちょうど良いようなのでこのまま続けたい。
2413681心理教育統計学実習:SPSSという統計ソフトの使い方と結果の書き方という授業名なので、知識や技能の習得については評価が良かったが、その他の点ではあまり評価が高くなかった。わかりやすく説明できるようにしたい。

発表の方法や準備のしかたについては、受講生により分かりやすく伝えられるよう努めたい。
また発表後の質疑応答のやり方についても、発表者と質問者だけのやりとりに終わらせず、クラス全体の議論に発展させられるよう、考えていきたい。

学生による発表を中心とした学習の場合、学生の修得度が講義の場合と比べて低いと感じる。主体的な学習が必ずしも学生のためにはならないと思うので、今後は実施について検討していきたい。

次年度の授業では、学習目標の確認をより丁寧に行いたい。

演習では受講者が少なければ資料の扱い方から教えたいが、現実的には無理だろう。
高校までに身につけている読解力に個人差がありすぎるため、習熟度別に対応したいが方策が見当たらない。

比較的良い結果が出たと考えているが、指示の出し方などもう少し明確にしていきたいと感じる場面もあった。
演習の授業ということを考えると、個々の学生についてどのように成長を促すことができるかという点に課題を感じる。

パワーポイントの資料など、急ごしらえになってしまったものもあり、正しく指摘されていた部分もあった。
それだけ、注意を払って受講してくれていたことがありがたい。次の機会には改善できるようにしたい。
ただ、書道史の知識が少ない学生に対して「ちょうどいい」内容の授業は大学の授業としてはどうなのかと自ら疑問に思う。大学である以上、お膳立てがなくとも、自ら興味を持ち、調べ深める行為に励んでもらいたい。ただ難易度を上げるのではなく、より深く考えさせるような授業を構想したいと考える。

複数年にわたって担当しているが、年々受講者が増加しており教室がかなり狭めになっているので、教室を変更するなどの措置を大学と相談し、個々の学生と議論する時間や環境などを確保したい。

聴覚障がいをもつ学生が受講していたため、できるだけ大きな声でゆっくりとわかりやすく授業を進めることを心掛けた。また、口頭のみでの説明を可能な限り排し、板書やレジュメといった視覚情報によって授業内容が把握できるように努めた。それによって学生が、「話し方が聞き取りやすい」「説明や教材・教具がわかりやすい」という評価を行ったものであろう。ただし、図書館ツアーや学生の発表が主となる後半の演習においては、じゅうぶんなサポートを行うことができなかった。学生が発表慣れしていなかったため、早口になってしまったり、レジュメの不備を口頭で修正したり、という事態も発生した。アンケート当日に当該学生が欠席したため、本人の意見を反映することができない点が心残りである。
本授業を通して、ユニバーサルデザインを意識した授業構成・展開を心がけることの必要性を強く感じたので、それを続けてゆきたい。

概説、演習とも約70%が分かりやすい授業との評価をしており、満足度が高い。概説では平均点が77点もあり、理解度も大変高い。ちなみに、例年の平均点は60点台である。
演習では某講義もこのようなやり方でしてほしいとの自由記述もあった。
以上から、特に改善するところはなくこのままのやり方を続けていきたい。

問8「教員の話し方は聴き取りやすい」や、問9「教員の説明はわかりやすい」については高評価であったので、このまましていきたいと考えている。また、問13「授業の難易度」や問14「一回当たりで扱われる授業内容の量」についても、「ちょうどいい」という回答が多かったため、このまましていきたいと考えている。
その一方で、問3「自ら関連項目について情報を集め検討し～」や問4「学生どうして授業内容を深めあった」については、「どちらともいえない」や「あまりそう思わない」という消極的な意見が多かった。授業後の学生の自主学習をどう促していくかを今後の課題としたい。

60人を越える講義で、授業のための週当たりの学習時間が「1時間未満」あるいは「なし」とする学生が多くを占めてしまったので、自宅での課題を与えるなど改善したい。

授業のための学習時間が少ないため、宿題を出して学びを深めさせたい。

まずアンケートを行う際の不手際から、回答数が少ないことを前提として結果を見なければならぬが、講義の難易度と極端な学習時間の差異等を踏まえ、次年度以降は内容構成と課題の提示方法等を含めて改善を図っていきたい。